

テレビドラマとアニメの 主要キャラクターのダイバーシティ

——内容分析の報告——

洪 谷 明 子
麻 生 奈央子
大 坪 寛 子
祥 雲 暁 代
大 倉 韻 章
坂 元 章

1. はじめに

『虎に翼』(NHK)、『監察医朝顔』(フジ系)など、近年、女性が職場で活躍するドラマが増えている。また、『おっさんずラブ』(テレビ朝日系)、『グッド・ドクター』(フジ系)など、性的マイノリティや障がい者が登場するテレビドラマも見かけることがある。このようなテレビドラマを見ることは、柔軟で多様な価値観を形成するために役に立つのだろうか。このような問題意識から本研究はスタートした。

まず本研究が目にしたのは、10代後半から20代の若い人たちだ。この時期は、アイデンティティの確立、将来の進路、仕事、職業観、恋愛、結婚、仕事と家庭の両立など社会に対する価値観を形成する重要な時期である (Arnett, 2000)。テレビドラマはフィクションの世界であれ、このような重要な時期にロールモデルとなるような人物に出会うことは職業選択や今後の生き方などに影響を及ぼす可能性があるだろう。

一方で若い世代ではテレビ視聴者が減少傾向にある。総務省情報通信政策研究所 (2024) の調査では、平日リアルタイムでテレビを視聴する割合は10代 (13-19歳) で47.1%、20代 (20-29歳) で43.3%であり、

他の年代よりも少ない。ただし、テレビのリアルタイム視聴者の平均視聴時間は10代で平日83.2分、20代で124.4分（p. 10）となっており、比較的長い。また、オンデマンド型の動画配信サービス（Netflix、Amazon Prime Video など）の利用率も10代では71.4%、20代では81.1%と他の年代よりも高い。ソーシャル・ネットワークキング・サービス（SNS）で話題になったドラマ、TVerなどの見逃し配信で再生回数が多いドラマなどを、動画配信サービス、見逃し配信、スマートフォンなどで視聴する傾向が若年層では強い（野田, 2025）。さらに、同調査では10代や20代で他の世代よりもテレビドラマ、アニメへの関心が高いことが示されており、テレビ視聴形態が多様化しているとは言え、影響がみられる可能性がある。

そこで本プロジェクトでは、若い世代（16-24歳）でテレビドラマやアニメを週3時間以上視聴している人たちに3回のパネル調査を実施し、1回目の調査時によく視聴しているテレビドラマやアニメを教えてもらい、そこに登場した主要キャラクターに注目し、伝統的なジェンダーステレオタイプ、非伝統的なジェンダーステレオタイプ、マイノリティの存在などがジェンダー観や社会的価値観にどのような影響を及ぼすのか、その長期的影響を検証した。本研究はそのなかで、テレビドラマとアニメの主要キャラクターの内容分析の部分のみを報告する。

2. 先行研究の概要

メディアの登場人物の描かれ方は、ジェンダーステレオタイプの情報源となり得る。培養理論（cultivation theory）によれば、テレビの長時間視聴者は、テレビの世界と同じような現実認識をしやすい傾向がみられた（Morgan, 2009）。培養理論では、メディアにどのような男女が登場するかというジェンダー表象と性役割観、ジェンダーステレオタイプ、セクシズムとの関連性を説明している（Morgan, 1982, 1987）。近年、Hermann et al. (2021) は1970年代から2010年代に実施された372本の研究を分析し、統計的に有意な関連性があることを示した。日本でも、テレビの視聴時間が長い女性は伝統的な性役割観を抱く傾向がみられたが、男性や教育レベルが低い視聴者ではそのような関連性がみられなかった（Saito, 2007）。Hermann et al. (2021) の研究でも、アジアやラ

テンアメリカではテレビ視聴時間との関連性が弱いことが指摘されているため、さらなる研究が必要である。

社会的認知理論 (social cognitive theory) でもメディア接触により、学習が生じることが示されている (Bandura, 2001, Bandura et al., 1963)。保護者、教師、友人や同僚、家庭、教育環境、職場などの重要他者の言動によって、男性、女性としてふさわしい行動について学習が行われるが、テレビなどのマスメディアもその一つである (Bussey & Bandura, 1999)。

ジェンダーステレオタイプについての研究では、男女などのジェンダー描写のメディアの影響を示している。たとえば男性は支配的で、攻撃的に描かれる傾向にあり、年配の男性も多く登場するのに対して、女性はあまり登場せず、魅力的で、セクシーで、瘦身で、若い傾向がみられた (Sink & Mastro, 2017)。したがって、テレビの長時間視聴者はジェンダーステレオタイプ的な態度になりがちであることが予想されるが、反ステレオタイプの描かれ方をした場合はより柔軟な態度になることを示す実験もある (e.g., Ashby & Wittmaier, 1978; Johnston, 1983; O'Bryant & Corder-Bolz, 1978)。したがって、両方向の影響がメディアのジェンダー描写の影響として、想定される可能性がある。

メディアとジェンダーの研究で、欧米で研究されている理論の一つに Objectification theory がある。日本語ではモノ化理論、対象化理論などと訳されているが、少女や女性が自分自身の身体を観察者の視点で内在化する傾向があることを問題視する理論である (Fredrickson & Roberts, 1997)。なかでも性的モノ化はジェンダーに関する抑圧だけでなく、就業差別、性的暴力、女性の仕事や業績の矮小化などとの関連性が指摘されている。

また、本研究では、ジェンダーだけでなく、メディア表現のダイバーシティ (多様性) についても検討する。ダイバーシティは「国籍、年齢、性別、性的指向・性自認、人種、障がい、民族的背景、思想、宗教、社会経済的背景、教育的背景など」の様々な属性や背景をさす (日本メディア学会, 2025)。そして、インクルージョン (包摂) という言葉とともによく用いられ、そのような多様な個人が差別やハラスメントなどを受けないだけでなく、共存し、尊重し合い、平等な立場で参加し、互いに貢献できる環境を目指すことが重視されている (金山, 2024)。

社会心理学では、そのような様々な属性や背景の人たち、特にマイノリティの人々へのステレオタイプや偏見を低減させるための研究が蓄積されてきた。たとえば、ステレオタイプや偏見の低減という視点から、接触仮説 (contact hypothesis) が提唱されており、外集団 (自分自身とは異なる集団) メンバーへの直接的な接触によって、偏見やステレオタイプが低減する可能性を指摘している (Allport, 1954)。ただし、その効果がみられるためには、外集団メンバーと内集団 (自分自身と同じ集団) メンバーとの対等な地位、協力的なかかわり、共通のゴールなどの条件が必要である (浅井, 2012)。メディア接触という間接的な接触によっても偏見やステレオタイプの低減が生じる可能性も示唆されており、拡張接触仮説 (extended contact hypothesis)、パラソーシャル接触仮説 (parasocial contact hypothesis) などで指摘されている (Wright et al, 1997; Schiappa et al., 2006)。ただし、接触仮説と同様、内集団メンバーが外集団メンバーと親しいなどの条件が必要ではないかと考える。

たとえば、ドラマやアニメでも、非伝統的な性役割の主人公や主要キャラクターが描かれたり、管理職や専門職の女性、家事を積極的にする男性などが好意的に描かれたりする場合、非伝統的な性役割のキャラクターに共感を示す可能性があるだろう。また、性的マイノリティ、民族的マイノリティ、障がい者などが登場し、主人公と親しい場合では、マイノリティへの偏見やステレオタイプが低減する可能性があるかと予想される。ただし、このような効果がみられる条件として、反ステレオタイプのな (非伝統的な) キャラクターや多様な属性や背景の人たちがドラマやアニメに登場し、主要な登場人物の一人として描かれる必要があるだろう。このような形でメディアの影響、メディアで描かれる表現の影響を実証的に検証した研究はきわめて少ない。

テレビドラマの登場人物のジェンダーやダイバーシティに関する研究は欧米では継続的に行われてきた (e.g., Sink & Mastro, 2017)。日本では少ないが、研究は散見している。たとえば岩男 (2000) は 1977 年から 1994 年までのドラマやアニメを分析し、主要登場人物の 7 割は男性であり、男性は兵士・警官、違法活動、商・工・私企業、政府・公務員などで多いことを示した。その一方で、女性は専業主婦、学生、サービス業・水商売などで多い傾向がみられた (岩男, 2000)。近年でも、ドラマの主要登場人物は男性が 57-61% と多く、女性は 38-41% と少ない

ことが示されている（田島・祥雲・麻生・坂元，2020）。

外国出身者などが、ドラマやアニメにどの程度登場するのかという分析は少ないものの、地上波の外国制作の番組はアメリカが8割（原・中村・田中・柴田，2011）と多いことは示されている。障がい者はドラマにあまり登場しておらず、登場しても若い傾向があり、女性が多いことを指摘した研究も報告されている（Saito & Ishiyama, 2005）。

そのような背景から、本報告では、以下のような研究課題を立て、内容分析を行った。

- (1) ドラマとアニメの主人公、主要キャラクター（ドラマの登場人物も含む、以下同じ）のなかに、女性、性的マイノリティ、民族的マイノリティ、障がい者はどの程度含まれているか。
- (2) ドラマとアニメでは、主人公や主要キャラクターのジェンダーやダイバーシティはどのように異なるのか。
- (3) 主要キャラクターの性格や行動的特徴にジェンダーステレオタイプは見られるか。
- (4) 主要キャラクターの身体的特徴や肌の露出でジェンダーステレオタイプが見られるか。

3. 研究方法

3.1 人気ドラマ・アニメの抽出

2020年11月にドラマまたはアニメを週3時間以上視聴する16-24歳の3,539名（10代31.2%、20代68.8%；女性80.9%、男性17.9%、その他1.2%）を対象にインターネット調査を実施した。過去1か月で最もよく見たドラマまたはアニメを3つまであげてもらい、そこであげられた上位31番組（30位、31位は同数のため）を内容分析の対象にした。表1に示すように、31番組のうち、アニメは16番組であり、ドラマは15番組が選出された。視聴形態はほとんどの番組で、テレビ番組としての視聴が最も多かったが、動画配信サービスを通しての視聴形態もみられた（『鬼滅の刃』など）。

表1 内容分析の対象となったドラマとアニメ

順位	番組名	種別	おもな配信元	人数
1	この恋あたためますか	ドラマ	TBS系	527
2	鬼滅の刃	アニメ	Amazon Prime Video	430
3	呪術廻戦	アニメ	TBS系	319
4	姉ちゃんの恋人	ドラマ	フジ系	299
5	極主夫道	ドラマ	日本テレビ系	242
6	監察医朝顔	ドラマ	フジ系	237
7	#リモラブ～普通の恋は邪道～	ドラマ	日本テレビ系	233
8	ハイキュー!! TO THE TOP	アニメ	TBS系	230
9	名探偵コナン	アニメ	日本テレビ系	205
10	危険なビーナス	ドラマ	TBS系	195
11	ルパンの娘	ドラマ	フジ系	191
12	恋する母たち	ドラマ	TBS系	158
13	35歳の少女	ドラマ	日本テレビ系	133
14	七人の秘書	ドラマ	テレビ朝日系	115
15	エール	ドラマ	NHK総合	114
16	相棒 season19	ドラマ	テレビ朝日系	107
17	ドラえもん	アニメ	テレビ朝日系	94
18	ONE PIECE	アニメ	フジ系	92
19	炎炎ノ消防隊	アニメ	TBS系	88
20	先生を消す方程式。	ドラマ	テレビ朝日系	82
21	おそ松さん	アニメ	テレビ東京	75
21	クレヨンしんちゃん	アニメ	テレビ朝日系	75
23	ひぐらしのなく頃に 業	アニメ	TOKYO MX	63
24	進撃の巨人	アニメ	NHK総合	62
25	科捜研の女 season20	ドラマ	テレビ朝日系	58
25	僕のヒーローアカデミア	アニメ	アニマックス	58
25	銀魂	アニメ	テレビ東京系	58
28	半妖の夜叉姫	アニメ	日本テレビ系	52
29	ヒプノシスマイク	アニメ	TOKYO MX	50
30	メンズ校	ドラマ	テレビ東京	49
30	約束のネバーランド	アニメ	フジ系	49

3.2 内容分析のための手順

ドラマやアニメを視聴している大学生・大学院生14名（女13、男1）にアルバイトをお願いし、2022年7-9月に内容分析を行った。トレーニングを実施後、1番組について3名を無作為に振り分け、第1著者の研究室で分析してもらった。トレーニングでは、ドラマ『エール』とアニメ『ドラえもん』の各1話（15分）を用い、コーディング項目を説明した後で、実際に分析してもらった。たとえば、他の人を助ける、温かい言葉をかけるなどの行動が1回でも観察されたら、そのキャラクターは「やさしい」の項目に該当すること、リスクを恐れずに行動する、批判を恐れずに意見を言うなどの行動が1回でも見られたら、「勇気がある」の項目に該当することなどを説明した。その放送回で描写されたキャラクターの外見的な印象やイメージではなく、そのキャラクターの具体的な言動の有無で性格や行動の特徴を分析する必要があることを確認した。

分析対象の番組については、調査時の2020年10、11月に地上波で放映されたドラマ、アニメすべてを第1著者の自宅と職場でそれぞれ録画しておき、分析に用いた。調査時に放送がなかったアニメについては、第1著者がNetflixに契約して視聴してもらった（その場合は最初の90分を分析）。各番組について最低90分を分析対象とした（10分アニメは9本、15分アニメ・ドラマは6本、30分アニメ・ドラマは3本、1時間ドラマは2本）。話の途中から始まる番組については、番組ホームページ（HP）を参考にしてもらい、それでも関係性や内容がわからない場合は放送時までのエピソードを視聴してもらった。分析単位は、ドラマ・アニメの主人公は各番組とし、主要キャラクターについては各キャラクターをそれぞれ分析単位とした。

3.3 操作定義と分析カテゴリー

3.3.1 主人公

ドラマ・アニメの主人公：(a) タイトルになっていたり、ドラマやアニメで中心的な役割を果たしたりする（『ポケットモンスター』のサトシ、『犬夜叉』の犬夜叉など）。(b) (a) のような主人公が登場しない場合も、ある登場人物やキャラクターの視点でストーリーが展開してい

く場合は、その登場人物やキャラクターを主人公とする（『逃げるは恥だが役に立つ』の森山みくりなど）。(c) あるエピソードでは脇役でも番組のHPの人物相関図などで確認してもらい、同じ番組ではなるべく同じ主人公とした（登場した場合）。

3.3.2 主要キャラクターの基本的特徴

主要キャラクター：(a) ドラマやアニメで主人公のパートナーや仲間として、いっしょに協力したり、指示されたりする関係にある。(b) 主人公にとっての重要性（中心的な恋愛対象、配偶者、パートナー、強い敵、ライバル、助言者）などを基に、主人公を含めて最大5人まで選んでもらった。その上で、下記の7項目について分析した。本研究でダイバーシティの視点から、性別だけでなく、性的指向、年代、肌の色、出身国、障がいについても分析項目に加えた。

- (1) 種類：(a) 空想的キャラクター/実在する動物、(b) 擬人化された空想的キャラクター/実在する動物、(c) 人間、(d) 不明・情報なし。
- (2) 性別：(a) 男、(b) 女、(c) その他（特定できない性的マイノリティなど）、(d) 不明・情報なし。
- (3) 性的指向：(a) 異性が恋愛対象、(b) 同性が恋愛対象、(c) その他、(d) 不明・情報なし。
- (4) 年代：(a) 12歳以下、(b) 13-19歳、(c) 20-29歳、(d) 30-59歳、(e) 60歳以上。
- (5) 肌の色：(a) 白、(b) ベージュ/黄、(c) 茶、(d) 濃い茶/黒、(e) その他。
- (6) 出身国：(a) 日本人、(b) 日系外国人/在日外国出身者、(c) アジア出身者、(d) 欧米出身者、(e) その他の外国出身者、(f) 不明・情報なし。
- (7) 障がい：(a) 障がいの有無、(b) 障がいの種類：(i) 身体障がい、(ii) 精神・知的障がい、(iii) 発達障がい、(iv) その他・不明。

3.3.3 主要キャラクターの性格や行動的特徴

これまで指摘されてきた伝統的なジェンダーステレオタイプやドラマ・アニメなどの内容分析に基づいて（e.g., 伊藤, 1978; Sink & Mastro, 2017）、以下の特徴の有無を分析した。

- (1) 男性的な性格や行動的特徴：(a) 活動的である、(b) 指導力がある、(c) 支配的である、(d) 攻撃的である、(e) 自立している、(f) 頭がよい、(g) 勇気がある。
- (2) 女性的な性格や行動的特徴：(a) 従順である、(b) やさしい、(c) かわいい、(d) 感受性が強い、(e) 弱音を吐く、(f) 感情的になる、(g) 性的な魅力がある、(h) 家庭で家事や育児をしている。

3.3.4 主要キャラクターの身体的特徴

主要キャラクターの身体的特徴についても、以下のように分類した。同じカテゴリーでゲームのキャラクターについても分析しており、ゲーム研究では女性キャラクターの肌の露出、胸の強調などが問題視されているため、分析項目に加えた (Lynch et al., 2016)。ただし本分析では肌の露出 (胸) や胸の強調は女性だけでなく、男性の胸筋の強調や上半身の露出なども含めている。

- (1) 体格：Stunkard et al., (1983) の基準で「とてもやせている (1)」から「とても太っている (9)」の9段階。
- (2) 筋肉の強調：(a) ない (ほとんど目立たない)、(b) ある (胸筋が発達している、腹筋が割れているなど)。
- (3) 肌の露出 (胴体)：(a) ほとんど隠れている、(b) 腹やへそが見える、(c) 肌の露出は多いが、腰や尻は隠されている (ビキニなど)、(d) ほとんど裸。その上で、(b), (c), (d) を露出ありと分類した。
- (4) 肌の露出 (足の太もも)：(a) ほぼ隠れている、(b) 下半分のみ見える、(c) 上半分のみ見える、(d) ほとんど見える。その上で、(b), (c), (d) を露出ありと分類した。
- (5) 肌の露出 (胸)：(a) 見えない、(b) 胸 (女性は谷間も含む) が見える。
- (6) 胸の強調：(a) 大きさは普通、(b) 強調されている。
- (7) 腰や尻の強調：(a) 大きさは普通、(b) 強調されている。

3.3.5 主要キャラクターの職業

主要キャラクターの職業についても、以下のように分類した。

- (1) 職業：1：首相/大統領/知事/市長、2：議員/政治家、3：社長/校長/学長、4：管理職 (部長、課長、理事など)、5：専門・技術職 (医師、

教師、僧侶、プロスポーツ選手など、資格や能力が必要)、6:公務員/会社員、7:農林水産業、8:自由業(冒険者も含む)、9:アルバイト/パートタイム、10:専業主婦(夫)、11:学生(大学・大学院生、専門学校生)、12:小中高校生、13:その他(具体的に)、14:不明
その上で、A 管理職以上(1:首相/大統領/知事/市長、3:社長/校長/学長、4:管理職(部長、課長、理事など)、B それ以外に分類した。

3.4 信頼性

ドラマやアニメに登場した同じキャラクター 232 人について Scott の pi の複数コーダー版を用いてコーダー間の信頼性を計算した (Scott, 1955; Wilson et al., 1997)。信頼性係数の中央値は 1 項目(活動性のみ 0.76)ではやや低かったものの、他はすべて 1.0 となり、すべての項目の信頼性は確保された。

4. 研究結果

4.1 主人公の基本的特徴

分析対象となった 31 番組のなかで、主人公は女性 11 人 (35.5%)、男性 20 人 (64.5%) であり、男性のほうが多かった。ジャンル別では、ドラマ (15 番組) では女性主人公が 9 人 (60.0%) と多かったが、アニメ (16 番組) では女性主人公は 2 人 (12.5%、『半妖の夜叉姫』の日暮とわ、『約束のネバーランド』のエマ) と少なかった (図 1)。年代については、ドラマでは 14 人 (93.3%) が 20 歳以上だったのに対し、アニメでは 14 人 (87.5%) が未成年だった。

性的指向については、同性が恋愛対象の主人公は含まれていなかった。アニメでは不明・情報なしが 11 人 (68.8%) と多く、異性が恋愛対象である主人公は 5 人 (31.3%) だけだった。その一方でドラマでは異性が恋愛対象である主人公は 12 人 (80.0%) と多かった。

肌の色と出身国では、ベージュ(または黄)が 29 人 (93.5%) で、日本人が 28 人 (90.3%) で最も多かった。障がいがある主人公は少なかったが、吃音のある男性主人公が登場するドラマが 1 つあった (『エール』の古山裕一)。

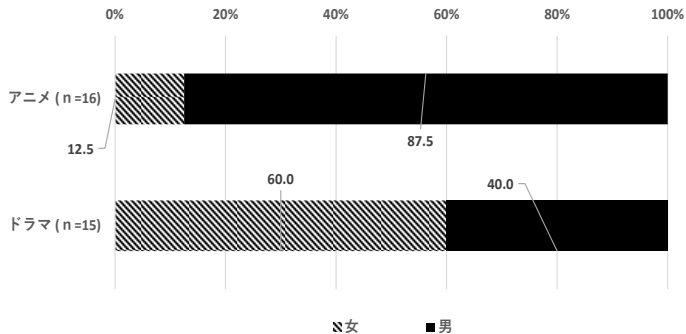


図1 アニメ、ドラマの主人公の性別 (n=31)

4.2 主要キャラクターの基本的特徴

31番組の各エピソードに登場した主要キャラクターについて、同じ番組内の同じ名前のキャラクターを1人にまとめたところ、280人の主要キャラクターが選出された(主人公を含む)。

- (1) 種類：人間が266人(95.0%)と最も多く、擬人化された空想的キャラクター/実在する動物14人(5.0%)が次に多かった(これはすべてアニメ)。空想的キャラクター/実在する動物、不明・情報なしは主要キャラクターではいなかった。
- (2) 性別：キャラクター全体では男性が166人(59.3%)で女性の111人(39.6%)よりも多かった。その他は1人(0.4%)と最も少なく、不明・情報なしも2人(0.7%)と少なかった。人間のみでは男性156人(58.6%)が女性109人(41.0%)よりもやや多く、その他は1人(0.4%)だった。ジャンル別では、ドラマに登場した人間108人のうち、男性56人(51.9%)、女性52人(48.1%)と均衡していたが、アニメでは人間158人中、男性100人(63.3%)、女性57人(36.1%)と男性のほうがやや多かった。
- (3) 性的指向：キャラクター全体では、不明・情報なしが146人(52.1%)と一番多かったが、異性が恋愛対象も134人(47.9%)と次に多かった。同性が恋愛対象、その他は該当者がいなかった。ジャンル別(人間のみ)の分析では、異性愛がドラマでは75人(69.4%)であるのに対して、アニメは57人(36.1%)のみと少なかった。

- (4) 年代：年代が特定できる人間 265 人全体では、男女とも 30-59 歳が最も多かった（男性 54 人、34.8%；女性 37 人、33.9%）。ジャンル別（人間のみ）でみると、図 2 に示すように、アニメでは、13-19 歳 46 人（29.3%）、20-29 歳 45 人（28.7%）の順で多いのに対して、ドラマでは、30-59 歳 58 人（53.7%）、20-29 歳 22 人（20.4%）の順で多い傾向がみられた（ $\chi^2(4, n = 265) = 41.20, p < 0.001$ ）。ジャンル別で男女差はみられなかった。
- (5) 肌の色：ドラマでは男女ともベージュ/黄がほとんどで男女差はみられなかった。図 3 に示すようにアニメでもベージュ/黄が過半数を占めたが、女性のほうが男性よりも白が 20 人（35.1%）と多い一方で、女性では茶、濃い茶/黒はほとんど見られなかった（ $\chi^2(3, n = 156) = 8.70, p < 0.05$ ）。
- (6) 出身国：名前やキャラクター情報から出身国を推測できる人間 241 人の出身地を表 2 に示した。日本人がほとんどであり、ドラマは 107 人（99.1%）、アニメも 134 人（96.4%）だった。日系外国人/在日外国出身者は 2 人（1.4%）がアニメで登場し（『ハイキュー!! TO THE TOP』の尾白アランと『ヒプノシスマイク』のアイリス・イノセント・トレイター）、その他の外国出身者も 3 人（2.2%）登場した。ドラマでは、1 人（0.9%）のみがアジア出身者だった（『この恋あたためますか』の主人公井上樹木の同居人である李思涵で、中国出身者だった）。
- (7) 障がい：障がい者は 2 人のみ（ドラマ）で、2 名とも男性で、身体障がい者だった。

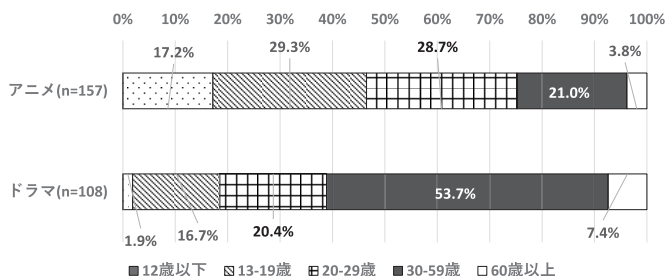


図 2 年代でみたアニメ、ドラマのキャラクター（ $n=265$ ）

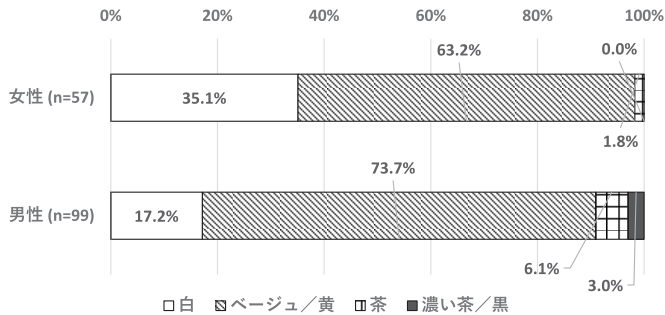


図3 肌の色でみた男女キャラクター (n=156, アニメのみ)

4.3 主要キャラクターの性格や行動的特徴

人間の男女のみ 265 人 (女 109 人、男 156 人) に対して、伝統的なジェンダースtereotypeに基づいた分析を行った。その結果、図4に示すように、男女間で統計的に有意な違いがみられたのは、男性性では「攻撃的である」のみで、男性 (54 人、34.6%) のほうが女性 (22 人、20.2%) よりも多かった ($\chi^2 (1, n = 265) = 6.53, p < 0.05$)。女性性では「家庭で家事や育児をする」のみで女性 (25 人、22.9%) のほうが男性 (18 人、11.5%) よりも ($\chi^2 (1, n = 265) = 6.13, p < 0.05$)。他の項目では差がみられなかった。

ジャンル別では、男性性の「指導力」はアニメでは男性 (33 人、33.0%) のほうが女性 (8 人、14.0%) より多く、ドラマでは女性 (13 人、25.0%) のほうが男性 (5 人、8.9%) よりも多かった。女性性の「やさ

表2 出身国を推測できるキャラクター (n=247、人間ののみ)

	日本人	日系外国人/ 在日外国出身者	アジア出身者 (日本以外)	その他の外国出身者 (中東、中南米、ロシア、 アフリカなど)
アニメ (n=139)	134 (96.4%)	2 (1.4%)	0 (0.0%)	3 (2.2%)
ドラマ (n=108)	107 (99.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

しい」は、ドラマでのみ差がみられ、男性（22人、39.3%）のほうが女性（9人、17.3%）よりもやさしい人が多かった。女性性の「家庭で家事や育児をする」のうち、アニメでは「料理・ミルク」と「子どもとかわる」で女性（それぞれ8人の14.0%、10人の17.5%）のほうが男性（それぞれ1人の1.0%、5人の5.0%）より多く、ドラマでも「料理・ミルク」では女性（13人、25.0%）のほうが男性（5人、8.9%）よりも多かった。ジャンル別では他の項目では差がみられなかった。

4.4 主要キャラクターの身体的特徴

主要キャラクターで身体的特徴を可視化できる人間の男女265人（女109人、男156人）の分析を行った。図5に示すように体格では女性（ $M = 3.36, SD = 0.73$ ）のほうが男性（ $M = 3.94, SD = 1.10$ ）よりもやせ型であった（ $t(263) = 4.77, p < 0.001$ ）。ジャンル別ではドラマ、アニメともに、女性のほうがやせ型であった（ドラマの平均値は女性3.2、男性3.6で、アニメでは女性3.5、男性4.1だった）。

筋肉の強調は全体でも男性（31人、19.9%）が女性（1人、0.9%）よ

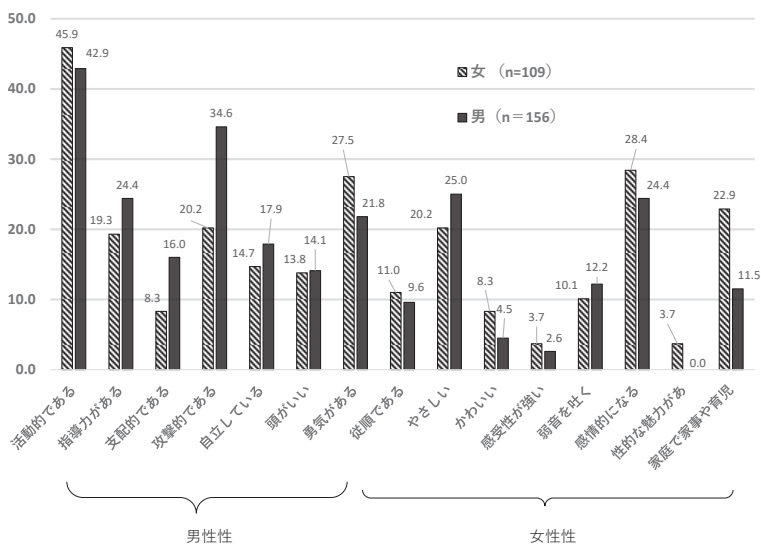


図4 主要キャラクターの性格と行動的特徴（ $n=265$ 、縦軸の数値は%。なお、「性的な魅力がある」男性は該当者がいなかったため図示されていない）

り多くみられた (図6)。ジャンル別ではアニメでは女性は1人 (1.8%) のみだったが (『炎炎ノ消防隊』の茉希尾瀬のみ)、男性は30人 (30.0%) と差が大きく、アニメでは男性の筋肉が強調されていた。肌の露出 (足の太もも) は全体でも女性 (38人、34.9%) のほうが男性 (34人、21.8%) よりも多い傾向がみられ、ジャンル別でもともに男女差がみられた (アニメは女性29人で50.9%、男性は31人で31.0%であり、ドラマでは女性9人で17.3%、男性は3人の5.4%だった)。肌の露出 (胴体、胸)、胸、腰や尻の強調では男女差はみられなかった。

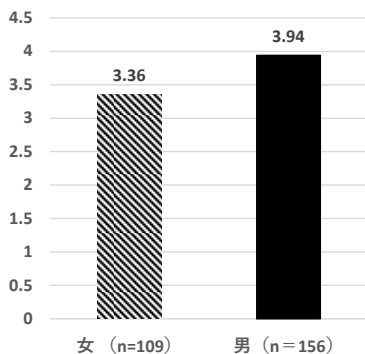


図5 主要キャラクターの体格 (n=265)

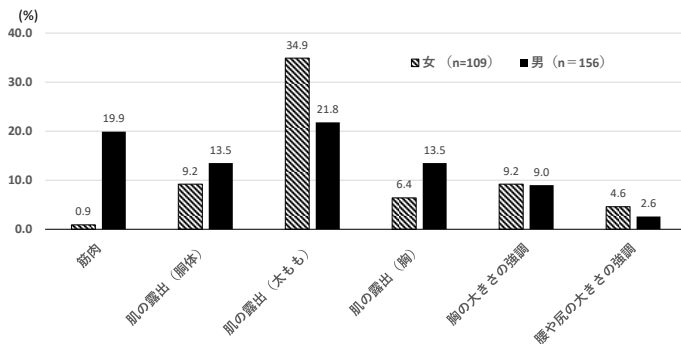


図6 主要キャラクターの身体的特徴 (n=265)

4.5 主要キャラクターの職業・社会的地位

主要キャラクターの人間の男女 265 人の職業では、表 3 に示すように、男性では管理職以上が 7 名 (4.5%) いたが、女性の管理職以上は一人もいなかった。職業別では、女性はアルバイト/パートタイムが 5 人 (4.6%)、専業主婦 (夫) 14 人 (12.8%) であり、男性より多い傾向がみられた (男性はそれぞれ、0 人の 0.0% と 1 人の 0.6%)。他の職業では統計的に有意な男女差はみられなかった。

5. 考察

研究課題 1 は、「ドラマとアニメの主人公、主要キャラクターのなかに、女性、性的マイノリティ、民族的マイノリティ、障がい者はどの程度含まれているか」であり、研究課題 2 は、「ドラマとアニメでは、主人公や主要キャラクターのジェンダーやダイバーシティはどのように異

表 3 主要キャラクターの職業・社会的地位 (n=265)

	女 (n=109)	男 (n=156)
管理職以上		
首相/大統領/知事/市長	0.0%	0.6%
社長/校長/学長	0.0%	2.6%
管理職	0.0%	1.3%
それ以外		
議員/政治家	0.0%	0.6%
専門・技術職	12.8%	16.7%
公務員・会社員	16.5%	22.4%
自由業	6.4%	7.1%
アルバイト/パートタイム	4.6%	0.0%
専業主婦 (夫)	12.8%	0.6%
学生	1.8%	2.6%
小中高校生	14.7%	21.8%
その他	15.6%	16.0%
不明	14.7%	7.7%
合計	100.0%	100.0%

なるのか」であった。ここでは、主人公と主要キャラクターに分けて、ドラマとアニメの違いについても、まとめて報告する。

5.1 主人公の基本的特徴

主人公はドラマでは女性も60%と多かったが、アニメでは12.5%と少なかった。女性のほうが男性よりもドラマを視聴する傾向があるが、そのような女性視聴者を意識してか、ドラマの主人公に女性が多いことがあらためて確認されたと言えよう。その一方で、アニメの主人公では女性は少なく、男性でも未成年の割合が高かった。これはアニメの原作に少年漫画が多いことがその理由の一つだと思われる。近年、若い女性の中でもアニメが人気であるが、このような特徴の一般化がみられると、女性は主人公ではなく、脇役で、主人公の男性をサポートするという価値観が視聴者に形成されてしまう可能性もあるだろう。

また性的指向では、アニメでは性的指向が描かれない作品が多かったが、ドラマでは異性愛が過半数を占めていた。これは、アニメではスポーツや戦いなどもテーマの中心にあり、恋愛が描かれないアニメも多いが、ドラマでは恋愛が中心的要素の一つになりがちであることを示唆している。その上、主人公が同性愛者というドラマもアニメも調査時のランキング上位にはあがらず、異性愛がドラマの中心的要素であることもあらためて確認された。

5.2 主要キャラクターの基本的特徴

次に、主要キャラクターの男女比では、男性が59%と女性よりもやや高かったが、岩男（2000）の7割よりはやや低かった。また、ジャンル別では、ドラマは男性52%と男女比が均衡していたが、アニメでは男性63%とやや高めだった。また、主要キャラクターの多様性という点から考えると、アニメキャラクターは若く、女性は肌が白く描かれることが多く、男性キャラクターよりも多様性に乏しい点を確認された。

また、性的マイノリティは主要キャラクターでは少なかった。近年のドラマでは、『おっさんずラブ』だけでなく、同性愛者の友人や同僚が登場する機会も増えていたが、この時期には少なかった。なお、『エール』では御手洗清太郎という音楽教師が登場し、男性のような外見だが、女性のような言葉遣いで話していた。主要キャラクターとしては選出さ

れなかったので本研究の分析対象にはならなかったが、脇役でもドラマに多様な個人が描かれることは重要ではないかと考える。

また、主要キャラクターの国籍では、日本人がほとんどであり、外国出身者は少なかった。近年日本では在留外国人数が増加しており（出入国在留管理庁、2025）、日本で生活する外国出身者との相互理解が求められている。このような社会的状況のなかで、日系外国人/在日外国出身者、アジア出身者はもっと登場してほしいと思えた。そのなかで、アニメでは日系外国人/在日外国出身者、外国出身者が5人登場しており、ドラマでは『この恋あたためますか』の李思涵のみだった。たった一人ではあるが、このドラマは放送時に最も人気だっただけに、このような描写を増やしていくことは重要だろう。近年、中国人、ベトナム人などのアジア出身者が増えつつあるなかで、ドラマでも主要キャラクターや脇役として描いていくことは外国出身者への親近感を促し、相互理解を図る一助になっていく可能性がある。さらに、日本のドラマやアニメはアジアでも人気となる作品がしばしばあり、特に一部のアニメは外国でも人気コンテンツになっている。外国市場で自国の出身者のようなキャラクターがどのように描かれるかは、その国の視聴者にとっても重要な要素になっていくと予想する。

最後に、本分析では障がいがある人が登場する機会が少なかった点も確認したい。登場した2名は、ともに身体障がい者であり、精神・知的障がい、発達障がいなどがある個人は描かれていなかった。近年、『オレンジデイズ』（TBS系）、『silent』（フジ系）など、聴覚障がい者が主人公や主要キャラクターであるドラマは見かけるが、他の障がい者との相互理解を深めるようなドラマはまだ少ないように思われる。Saito & Ishiyama（2005）が指摘したように、ドラマで障がい者が描かれることが少ないことが本研究でも確認された。また、本研究では2名とも男性であり、人数としてはより多い精神障がいや知的障がいのある個人は描かれていなかった点も確認された。

5.3 主要キャラクターの性格・行動的・身体的特徴・職業

研究課題3は、「主要キャラクターの性格や行動的特徴にジェンダーステレオタイプは見られるか」であり、研究課題4は、「主要キャラクターの身体的特徴や肌の露出でジェンダーステレオタイプが見られる

か]であった。主要キャラクターのジェンダースtereotypeについて、まとめて報告する。

ジェンダースtereotypeに基づいた主要キャラクターの性格や行動面では、男性では「攻撃的」、女性では「家庭で家事や育児をする」という特徴がみられた。ジャンル別では、アニメでは「指導力」があるという点で男性的な特徴が男性キャラクターにみられた。逆にドラマでは、男性が「やさしい」、女性が「指導力がある」など、反stereotype的な傾向がみられた点も興味深い。一方で、ドラマでもアニメというフィクションの世界でも、女性が中心となり家事を担っており、管理職は少ない点が確認された。身体的特徴でも、女性のほうがやせ型で、肌(太もも)の露出が多いこと、男性に筋肉の誇張が多いことも確認された。

筋肉や指導力など、男性性が少年漫画を原作としたアニメで強調されていることが本分析であらためて確認されたと言えるだろう。ドラマでは反stereotypeな特徴もみられたが、家事を担うのは女性が多く、管理職は少ないという点では、stereotype的な描写が維持されていると言える。

その一方で、本研究の分析対象だったドラマのなかには、『監察医朝顔』などのように主人公の父親や夫が家事をするドラマもみられた。また、職場がおもな舞台になるドラマも多くみられ、女性主人公が職場でリーダーシップを発揮しながら、やさしい上司や同僚の男性のサポートを受けるといったドラマもみられた。このような反stereotypeなキャラクターが描かれることは、10代や20代の若い世代の職業選択やワーク・ライフバランスなどの考え方に影響を与える可能性があると言えるだろう。

5.4 本研究の限界と今後の課題

本研究には下記の限界がある。第一には、パネル調査では女性回答者が男性回答者よりも多く、人気ドラマやアニメの選出に女性視聴者の嗜好が反映されていると思われる点である。第二には、人気上位30位のドラマやアニメを90分から2時間視聴した内容に基づいて分析した結果である点である。第三には、ドラマとアニメという2つのジャンル別に分類したのみで、放送時間帯、ドラマやアニメのジャンル別の分析は

行っていない点である。第四に、本研究では伝統的なジェンダーステレオタイプに基づいて、ステレオタイプと反ステレオタイプに分析したが、女性への気遣いなどの新しい男性役割観も提案されており（渡邊, 2017）、本研究でみられた男性の「やさしさ」は反ステレオタイプではなく、女性は弱いので男性が守らなければならないという好意的セクシズムを助長している可能性もあるなど単純化できない点である。第五には、体格、肌の露出、筋肉の有無などの身体的特徴に限定し、服装や髪型などの分析はできなかった点である。

このような限界はありつつも、ドラマやアニメの主要キャラクターを男性性、女性性のステレオタイプの・反ステレオタイプの要素に分け、量的な分析を試みた研究は日本ではまだ少ない。さらに本研究では、この内容分析の結果と縦断研究（パネル研究）の結果を統合することによって、メディア表現の長期的影響の分析を試みている点も追記したい（Shibuya et al., 2026）。また、同じ調査で選出されたゲームで、同じカテゴリーに基づく内容分析を、ゲームの主要キャラクターについても行っていることを併せて追記する（渋谷ほか, 2022）。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP20K03318 の助成を受けた。パネル調査と内容分析は創価大学人を対象とする研究倫理委員会（2020042）、成城大学研究倫理審査臨時部会および同大学部局長会議（2021年5月6日）で承認された。

参考文献

- Allport, G. W. (1954). *The nature of prejudice*. Addison-Wesley.
- Arnett, J. J. (2000). Emerging adulthood. A theory of development from the late teens through the twenties. *The American Psychologist*, 55(5), 469-480.
- 浅井暢子 (2012). 偏見低減の理論と可能性 加賀美常美代・横田雅弘・坪井健・工藤和宏編著 多文化社会の偏見・差別 明石書店, pp.100-124.
- Ashby, M. S., & Wittmaier, B. C. (1978). Attitude changes in children after exposure to stories about women in traditional or nontraditional occupations. *Journal of Educational Psychology*, 70(6), 945-949. <https://doi.org/10.1037/00220663.70.6.945>
- Bandura, A. (2001). Social cognitive theory of mass communication. *Media Psychology*, 3(3), 265-299.

- Bandura, A., Ross, D., Ross, S. A. (1963). Imitation of film-mediated aggressive models. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 66, 3–11.
- Bussey, K., & Bandura, A. (1999). Social cognitive theory of gender development and differentiation. *Psychological Review*, 106(4), 676–713. <https://psycnet.apa.org/doi/10.1037/0033-295X.106.4.676>
- Fredrickson, B. L., & Roberts, T. A. (1997). Objectification theory: Toward understanding women's lived experiences and mental health risks. *Psychology of Women Quarterly*, 21(2), 173–206. <https://doi.org/10.1111/j.1471-6402.1997.tb00108.x>
- 原由美子・中村美子・田中則広・柴田亜樹 (2011). 日本のテレビ番組における外国要素. *NHK 放送文化研究所年報*, 55, 59–77.
- Hermann, E., Morgan, M., & Shanahan, J. (2021). Television, continuity, and change: A meta-analysis of five decades of cultivation research. *Journal of Communication*, 71(4), 515–544. <https://doi.org/10.1093/joc/jqab014>
- 伊藤裕子 (1978). 性役割の評価に関する研究. *教育心理学研究*, 26(1), 1–11.
- 岩男壽美子 (2000) テレビドラマのメッセージ—社会心理学的分析—, 勁草書房
- Johnston, J. (1983). Using television to change stereotypes. *Prevention in Human Services*, 2, 67–81. https://doi.org/10.1300/J293v02n01_06
- 金山杏佑子 (2024. 8. 14) ダイバーシティとは? 具体例や背景、ダイバーシティ経営の現状を解説『朝日新聞』 <https://www.asahi.com/sdgs/article/15388018>
- Lynch, T., Tompkins, J. E., van Driel, I. L., & Fritz, N. (2016). Sexy, strong, and secondary: A content analysis of female characters in video games across 31years. *Journal of Communication*, 66(4), 564–584. <https://psycnet.apa.org/doi/10.1111/jcom.12237>
- Morgan, M. (1982). Television and adolescents' sex-role stereotypes: A longitudinal study. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 947–955.
- Morgan, M. (1987). Television, sex-role attitudes, and sex-role behavior. *Journal of Early Adolescence*, 7, 269–282.
- Morgan, M. (2009). Cultivation analysis and media effects. in Nabi, R. L. and Oliver, M. B., (eds.) *The SAGE handbook of media processes and effects*, SAGE, pp. 69–82.
- 日本メディア学会 (2025). 日本メディア学会ダイバーシティ宣言. https://www.jams.media/20250726-diversity_statement_2025/
- 野田絵美 (2025). 若者の「推しドラマ」はこう生まれる! 調査データで見るドラマとの出会いからファン化への過程 「ドラマをめぐるメディアジャーニー」前編 博報堂メディア環境研究所ウェビナー <https://>

- mekanken.com/contents/8505/
- O'Bryant, S. L. & Corder-Bolz, C. R. (1978). The effects of television on children's stereotyping of women's work roles. *Journal of Vocational Behavior*, 12(2), 233-244. [https://doi.org/10.1016/0001-8791\(78\)90038-6](https://doi.org/10.1016/0001-8791(78)90038-6)
- Saito, S. (2007). Television and the cultivation of gender-role attitudes in Japan: Does television contribute to the maintenance of the status quo? *Journal of Communication*, 57(3), 5115-31.
- Saito, S. & Ishiyama, R. (2005). The invisible minority: under-representation of people with disabilities in prime-time TV dramas in Japan. *Disability & Society*, 20(4), 437-451. <https://doi.org/10.1080/09687590500086591>
- Schiappa, E., Gregg, P. B., & Hewes, D. E. (2006). Can one TV show make a difference? Will & Grace and the parasocial contact hypothesis. *Journal of Homosexuality*, 51(4), 15-37.
- Scott, W. A. (1955). Reliability of content analysis: The case of nominal scale coding. *Public Opinion Quarterly*, 19, 321-325.
- 渋谷明子・大倉韻・祥雲暁代・麻生奈央子・大坪寛子 (2022). ゲームキャラクターのダイバーシティ：人気ゲームの内容分析の報告 日本デジタルゲーム学会第12回年次大会予稿集, 63-66. https://www.jstage.jst.go.jp/article/digraiproc/12/0/12_63/_article/-char/ja/
- Shibuya, A., Asoh, N., Otsubo H., Shoun, A., Okura, H., & Sakamoto, A. (2026). Long-term effects of (anti-) stereotypical gender depiction of TV drama and animation in Japan. *Keio Communication Review*, 48, 49-66.
- 出入国在留管理庁 (2025). 令和7年6月末現在における在留外国人数について. https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00057.html
- Sink, A. & Mastro, D. (2017). Depictions of gender on primetime television: A quantitative content analysis. *Mass Communication and Society*, 20, 3-22. <https://doi.org/10.1080/15205436.2016.1212243>
- 総務省情報通信政策研究所 (2024). 令和5年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書 https://www.soumu.go.jp/main_content/000976477.pdf
- Stunkard, A., Sorenson, T., & Schulsinger, F. (1983). Use of Danish adoption register for the study of obesity and thinness. In Kety, S., Rowland, L.P., Sidman, R. L., & Matthysse, S. W. (eds.) *The genetics of neurological and psychiatric disorders*. New York: Raven, pp. 115-120.
- 田島祥・祥雲暁代・麻生奈央子・坂元章 (2020) テレビドラマの職業描写に関する内容分析—勤労観及び働くことに対する価値観の描かれ方— 東海大学現代教養センター紀要, 4, 59-72.
- 渡邊寛 (2017). 多様化する男性役割の構造——伝統的な男性役割と新しい男

性役割を特徴づける4領域の提示—— 心理学評論 60(2), 117-139.

Wilson, B. J., Kunkel, D., Linz, D., Potter, J., Donnerstein, E., Smith, S. L., Blumenthal, E., & Gray, T. (1997). Violence in the television programming overall: University of California, Santa Barbara study. In *National Television Violence Study* (Vol. 1, pp.3-268). Newbury Park, CA: Sage.

Wright, S. C., Aron, A., McLaughlin-Volpe, T., & Ropp, S. A. (1997). The extended contact effect: Knowledge of cross-group friendships and prejudice. *Journal of Personality and Social psychology*, 73(1), 73-90. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.73.1.73>